

教育学部生の管楽器指導力に対する評価

宮崎大学教育学部附属中学校吹奏楽部における事例研究

浦 雄一¹・河野哲志²

Evaluating the Wind Instrument Teaching Skills of Education Majors: A Case Study of the University of Miyazaki Junior High School Band Club

Yuichi URA, Tetsushi KAWANO

1 はじめに

宮崎大学教育学部浦研究室では、本学部附属中学校吹奏楽部からの要請により、教員による指導助言（平成26年度～）および研究室所属学生らによる楽器指導（平成27年度～）を断続的に実施している。このうち、学生による楽器指導は、中学生と大学生、双方にとって学びの機会となっている。しかしながら、本活動の実際の効果については、これまで検証を行ったことがなく不明であった。

そこで、本研究では、附属中学校生徒を対象としたアンケートを実施し、本学部学生の管楽器指導力について分析する。また、その結果を踏まえて、楽器指導能力の育成を視野に入れた教員養成カリキュラムの必要性について検討する。

2 取り組みの概要

2.1 大学における取り組み

本学部の現行カリキュラムにおいては、管楽器の基本的な奏法を修得できる「合奏Ⅰ～Ⅱ」ならびに合奏指導法を学修する「合奏Ⅲ」が開講されているが、楽器演奏指導に特化した科目は設定されていない。平成27年度以前の入学生に適用されるカリキュラムでは「音楽表現論」が開講されており、管楽器のために作曲された楽曲について学ぶことも選択できたが、指導法に関する内容は扱われていなかった。

¹ 宮崎大学教育学部

² 宮崎大学教育学部附属中学校

2.2 附属中学校吹奏楽部における取り組み

学生による楽器指導は、平成27年度から3ヶ年に亘って実施している。実施時期は毎年7月に開催される吹奏楽コンクール前に集中しており、実施回数は平成27年度2回(6月1回, 7月1回), 28年度2回(6月1回, 7月1回), 29年度3回(5月1回, 6月1回, 7月1回)となっている。1回あたりの指導時間は1～3時間程度, 平均は1時間40分程度であった。

指導方法は、いわゆる「パート練習」をコーチングする形態とし、指導内容(重点的に練習する曲目, 基礎練習課題, 時間配分等)については各学生の裁量とした。

指導を行った学生は、浦研究室所属学生を始めとした音楽専修(専攻/副専攻)学生がほとんどであるが、浦が担当する「合奏」を履修した他専修学生も若干名含まれる。これまでに学生が指導した楽器の種類は次の通り:フルート, オーボエ, クラリネット, サキソフォン, トランペット, トロンボーン, ユーフォニウム, テューバ, コントラバス³。

3 調査方法

3.1 予備調査

中学生の楽器演奏の意識に及ぼす大学生の演奏指導の効果を把握するために、平成29年7月中旬, 同年4月より宮崎大学教育学部学生に楽器演奏の指導を受けた同学部附属中学校吹奏楽部の1～3年生42名に対して、予備調査を実施した。予備調査では、部員に対して調査の趣旨を説明するとともに、中学生の楽器演奏の意識に及ぼす大学生の演奏指導の効果について幅広く知ることを目的とし、大学生の指導に関してどのような点が良かったと思うか自由記述で回答させ、その内容によって16項目に分類した⁴。

次に、この16項目について、同じ吹奏楽部部員に対し、追加修正する項目の有無について自由記述での回答を求めた。追加修正に関わるアンケートは、7月下旬に実施した。その結果、追加修正を求める意見はなかったため、この16項目により本調査を実施することとした。

3.2 本調査

本調査は、平成29年8月中旬に行った。尚、本調査では、予備調査に参加した部員40名⁵および予備調査に参加していない部員2名の計42名に回答を求めた。アンケート用紙は、吹奏楽部顧問(河野)が部活動開始時に配付し、趣旨を説明したのちに10分間で回答させて回収した。42名全員からの回答があり、有効回答率は100%であった。尚、本論文の中では、本調査で有効回答を得た42名を調査協力者と呼ぶ。

本調査では、調査協力者に表1の16項目について、“非常にそう思う”, “とてもそう思う” “どちらかといえばそう思う”, “どちらかといえばそう思わない”, “あまり思わない”, “まったく思わない”の6件法での回答を求めた。アンケート用紙には、学年, 名前等は記述させず、指導者(大学生)や回答者(中学生)が特定されないようにした。また、アンケートの結果が大学生や中学生の成績等に一切影響しないことを確認した。

³ コントラバスは弦楽器であるが、一般的な吹奏楽編成に含まれるため本研究の対象とする。

⁴ 表1内<項目>参照。

⁵ 予備調査に参加したが、本調査当日は欠席だった部員がいたため、2名減少した。

⁶ 予備調査は欠席のため不参加だったが、本調査当日には出席した部員。

表1：アンケート用紙

このアンケートは、学生の楽器演奏指導についてのアンケート調査です。これまで、宮崎大学の大学生に楽器演奏の指導をもらった経験がある人は、全員、回答してください。なお、このアンケートは、指導者(学生)や回答者(生徒)が特定されないようにします。また、このアンケートの結果は、大学生や中学生のみなさんの成績に いったい影響しませんので必ず正直に答えてください。						
※ いずれかに○を付けてください。						
<項目>	非常に そう思う	とても そう思う	どちらか という ええ そう 思う	ど ちら か と い え ば そ う 思 わ な い	あ ま り 思 わ な い	ま っ た く 思 わ な い
大学生の先生が指導してくれる時間は楽しかった。						
大学生の先生のような音を出せるようになりたいと思った。						
大学生の先生の指導を受けて、よい音とどのような音か分かった。						
大学生の先生の指導を受けて、楽器の練習を頑張ろうという気持ちになった。						
大学生の先生の指導は、言葉の表現が的確で分かりやすかった。						
大学生の先生は、質問に的確に答えてくれた。						
大学生の先生の指導を受けて、自分の楽器演奏における悪い所がわかった。						
大学生の先生の指導を受けて、自分の楽器演奏における良い所が分かった。						
大学生の先生に指導してもらって、どのような音を出せばよいイメージをすることができるようになった。						
大学生の先生の指導を受けて、どうすればよい音を出せるようになるか分かった。						
大学生の先生の指導を受けて、よい音が出せるようになった。						
大学生の先生の指導を受けて、練習している曲の演奏方法が分かった。						
大学生の先生の指導を受けて、これから先、どのように練習していけばよいか分かった。						
大学生の先生の指導を受けて、タンギングの仕方など演奏技術が向上した。						
大学生に指導してもらって、ほめられてうれしかった。						
大学生の先生の指導を受けて、楽器の取り扱い方が分かった。						

4 分析

4.1 指導効果の分析

表1の16項目について、どの項目が効果的であったと意識されているかを明らかにすることとした。まず、それぞれの項目について、“非常にそう思う”または“とてもそう思う”または“どちらかというそう思う”と回答した人数を合計し、【効果があった】と考えるグループの人数とした。次に、“どちらかというそう思わない”または“あまり思わない”または“まったく思わない”と回答した人数を合計し、【効果がなかった】と考えるグループの人数とした。そして、【効果があった】と考えるグループの人数と【効果がなかった】と考えるグループの人数の偏りを直接確率計算で求めた。この結果をまとめたものが表2である。尚、表2を含め、本論文中における検定結果は、有意差なしをn.s.、5%水準で有意を*、1%水準で有意を**で表記する。

表 2：指導効果の分析結果

<項目>	【効果があった】	【効果がなかった】	p 値	判定
大学生の先生が指導してくれる時間は楽しかった。	40	2	0.00	**
大学生の先生のような音を出せるようになりたいと思った。	42	0	0.00	**
大学生の先生の指導を受けて、よい音とはどのような音か分かった。	35	7	0.00	**
大学生の先生の指導を受けて、楽器の練習を頑張ろうという気持ちになった。	41	1	0.00	**
大学生の先生の指導は、言葉の表現が的確で分かりやすかった。	37	5	0.00	**
大学生の先生は、質問に的確に答えてくれた。	38	4	0.00	**
大学生の先生の指導を受けて、自分の楽器演奏における悪い所がわかった。	32	10	0.00	**
大学生の先生の指導を受けて、自分の楽器演奏における良い所が分かった。	24	18	0.22	n.s.
大学生の先生に指導してもらって、どのような音を出せばよいかイメージすることができるようになった。	35	7	0.00	**
大学生の先生の指導を受けて、どうすればよい音を出せるようになるか分かった。	33	9	0.00	**
大学生の先生の指導を受けて、よい音が出せるようになった。	24	18	0.22	n.s.
大学生の先生の指導を受けて、練習している曲の演奏方法が分かった。	31	11	0.00	**
大学生の先生の指導を受けて、これから先、どのように練習していけばよいか分かった。	39	3	0.00	**
大学生の先生の指導を受けて、タンギングの仕方など演奏技術が向上した。	32	10	0.00	**
大学生に指導してもらう中で、ほめられてうれしかった。	36	6	0.00	**
大学生の先生の指導を受けて、楽器の取り扱い方が分かった。	28	14	0.02	*

【効果がなかった】と考える人数よりも【効果があった】と考える人数の方が有意に多い項目は、

- 大学生の先生が指導してくれる時間は楽しかった。
- 大学生の先生のような音を出せるようになりたいと思った。
- 大学生の先生の指導を受けて、よい音とはどのような音か分かった。
- 大学生の先生の指導を受けて、楽器の練習を頑張ろうという気持ちになった。
- 大学生の先生の指導は、言葉の表現が的確で分かりやすかった。
- 大学生の先生は、質問に的確に答えてくれた。
- 大学生の先生の指導を受けて、自分の楽器演奏における悪い所がわかった。
- 大学生の先生に指導してもらって、どのような音を出せばよいかイメージすることができるようになった。
- 大学生の先生の指導を受けて、どうすればよい音を出せるようになるか分かった。
- 大学生の先生の指導を受けて、練習している曲の演奏方法が分かった。
- 大学生の先生の指導を受けて、これから先、どのように練習していけばよいか分かった。
- 大学生の先生の指導を受けて、タンギングの仕方など演奏技術が向上した。
- 大学生に指導してもらう中で、ほめられてうれしかった。

- ・ 大学生の先生の指導を受けて、楽器の取り扱い方が分かった。
- の計 14 項目であった。

4.2 探索的因子分析と調査協力者のグループ分け

表 1 の 16 項目の背景に、どのような因子が存在するのかを検索した。次に、因子の下位尺度得点をもとにしたクラスタ分析により、調査対象者をグループ分けしたうえで、グループごとに楽器演奏の意識に及ぼす大学生の演奏指導の効果を検討した。

4.2.1 探索的因子分析

アンケート調査を行った 16 項目に対して、主因子法による因子分析を行った。その結果、固有値は 5.060, 1.972, 1.745, 1.302, 1.166, 0.946, 0.803, 0.727・・・と変化しており、3 因子構造が妥当であると考えられた。そこで、再度 3 因子を仮定して主因子法で Promax 回転による因子分析を行ったところ、明確な 3 つの因子が得られた。Promax 回転後の最終的な因子パターンを表したものが表 3 である。なお、回転前の 3 因子で 16 項目の全分散を説明する割合は、54.86%であった。

表 3：Promax 回転後の因子パターン

項目	I	II	III
大学生の先生の指導を受けて、よい音とはどのような音か分かった。	0.811	-0.033	-0.152
大学生の先生の指導を受けて、タンギングの仕方など演奏技術が向上した。	0.701	0.097	-0.230
大学生の先生の指導を受けて、よい音が出せるようになった。	0.680	0.173	0.296
大学生の先生の指導を受けて、自分の楽器演奏における悪い所がわかった。	0.635	0.011	-0.020
大学生の先生に指導してもらって、どのような音を出せばよいかイメージすることができるようになった。	0.584	-0.182	0.120
大学生の先生の指導を受けて、どうすればよい音を出せるようになるか分かった。	0.565	-0.207	0.516
大学生の先生の指導を受けて、楽器の取り扱い方が分かった。	0.458	0.153	-0.036
大学生の先生の指導を受けて、自分の楽器演奏における良い所が分かった。	0.413	0.171	0.252
大学生の先生の指導を受けて、練習している曲の演奏方法が分かった。	0.408	0.320	-0.294
大学生の先生の指導を受けて、これから先、どのように練習していけばよいか分かった。	0.363	0.145	-0.042
大学生の先生のような音を出せるようになりたいと思った。	-0.048	0.804	-0.109
大学生の先生が指導してくれる時間は楽しかった。	0.183	0.630	0.077
大学生に指導してもらう中で、ほめられてうれしかった。	0.055	0.547	-0.078
大学生の先生の指導を受けて、楽器の練習を頑張ろうという気持ちになった。	0.113	0.431	0.151
大学生の先生の指導は、言葉の表現が的確で分かりやすかった。	-0.042	-0.108	0.738
大学生の先生は、質問に的確に答えてくれた。	-0.369	0.467	0.561

第 1 因子は楽器演奏の技術向上について表していると捉えられることから“技術向上”因子と命名した。第 2 因子は楽器演奏における関心・意欲・態度を表していることから“関心・意欲・態度”因子と命名した。第 3 因子は、中学生に説明する力を表していることから“説明力”因子と命名した。

この因子分析結果に基づき、3 因子に相当する項目の平均値を算出し、“技術向上”下位尺度得点 (平均 4.08, SD 0.75), “関心・意欲・態度”下位尺度得点 (平均 4.87, SD 0.68), “説明力”下位尺度得点 (平均 4.46, SD 0.75) とした。内的整合性を検討するために下位尺度得点の α 係数を算出したところ、“技術向上”で 0.84 と十分な値が得られた。“関心・意欲・態度”については 0.60, “説明力”で 0.60 であったが、これらの α 係数についても、今後のカリキュラムの在り方に関する知見を得るとい本研究の目的から十分であると捉えた。

下位尺度得点の平均値について分散分析を行ったところ有意差が見られた (F (2, 669) =31.96, p<.01)。Tukey の HSD 法 (5%水準) による多重比較を行ったところ、“関心・意欲・態度” > “説明力” > “技術向上”であり、“関心・意欲・態度”因子の下位尺度得点が最も

高いことが明らかとなった。

4.2.2 調査協力者のグループ分け

調査協力者をグループ分けするために4.2.1で明らかにした“技術向上”，“関心・意欲・態度”，“説明力”の3因子の下位尺度得点を用いて，Word法によるクラスタ分析を行った。その結果，調査協力者を3グループに分けることができた。

4.2.3 グループごとの分析

3グループを独立変数，“技術向上”，“関心・意欲・態度”，“説明力”を従属変数として分散分析を行った結果，“技術向上”，“関心・意欲・態度”，“説明力”ともに有意なグループ間差が見られた（“技術向上” $F(2, 39) = 9.98$ ，“関心・意欲・態度” $F(2, 39) = 15.51$ ，“説明力” $F(2, 39) = 30.83$ ，全て $p < .01$ ）。TukeyのHSD法（5%水準）による多重比較を行ったところ，“技術向上”については，第1クラスタ > 第2クラスタ，第1クラスタ = 第3クラスタ，第2クラスタ = 第3クラスタであった。“関心・意欲・態度”については，第1クラスタ = 第3クラスタ > 第2クラスタであった。“説明力”については，第1クラスタ = 第2クラスタ > 第3クラスタであった。

これらの結果から，第1クラスタは，他の2つのクラスタと比較してどの因子も下位尺度得点が高く，大学生の指導が効果的であったグループであるといえるので『高効果群』とした。第2クラスタは大学生の“説明力”については良い評価をしているが，“技術向上”や“興味・関心・態度”については下位尺度得点が低く，指導の効果が低かったと言えるグループなので『低効果群』とした。第3クラスタは，大学生の説明力について他のグループよりも評価が低いが，第3グループより“興味・関心・態度”が高く，“技術向上”についても第1グループの得点と有意差がなく，大学生の説明への理解が促されれば，高効果群に属する可能性のあるグループなので，『高効果予備群』とした。

それぞれのグループの人数をまとめたものが表4である。

表4：各グループの人数

第1グループ『高効果群』	第2グループ『低効果群』	第3グループ『高効果予備軍』
26人	7人	9人

各グループの人数の偏りを χ^2 検定で分析したところ，グループ間に有意な人数の偏りが見られた（ $\chi^2 = 15.57$ ， $df = 2$ ， $p < .01$ ）。ライアンの名義水準を用いた多重比較によれば，『高効果群』 > 『高効果予備軍』 = 『低効果群』（ $p < .05$ ）であった。

5 結果および考察

以上の結果，学生の指導により，楽器演奏の演奏技術や興味・関心・態度を高めている生徒が多いという実態が明らかとなった。また，学生の指導が効果的であったと考えられる生徒数は，効果が低かったと思われる生徒数と比較して有意に多かった。これらの結果は，教育学部の現行カリキュラムでは楽器演奏指導に特化した科目が設定されていないにも拘らず，本学部

学生の管楽器指導力が高い水準にあることを示唆している。浦研究室が附属中学校吹奏楽部に対する指導を開始した平成 26 年度以降、同部の演奏レベルが着実に向上している事実⁷も、このことを裏付けていると言えるだろう。

一方で、個別指導が必要な中学生（低効果群の生徒）も一定数存在した。この問題の解決、および解決へ導くための指導法研究は今後の課題である。学生に対しては、教科教育科目や「合奏」を始めとする教科専門科目における学修事項を統合し、現場のニーズに合わせた独自の指導法を開発するための能力を獲得できるよう、音楽教育講座として支援を図っていく必要があると考えられる。

参考文献

- 河野哲志, 新地辰朗「“D 情報に関する技術” に係わる学習指導改善に向けた中学生の情報通信概念の評価」『日本産業技術教育学会誌』53-1: 25-32, 2011.
- 河野哲志, 新地辰朗「自律型ロボットの利用を想定した計測・制御の学習に対する教師の意識調査」『日本産業技術教育学会九州支部論文集』20: 65-72, 2012.

⁷ 宮崎大学教育学部附属中学校吹奏楽部の県吹奏楽コンクールでの結果は、前年度まで 8 年連続で銅賞だったが、平成 26, 27 年度に銀賞, 28, 29 年度には金賞を受賞した。